
本当にあった不思議な体験

Missing

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当にあつた不思議な体験

【著者名】

ZZード

ZZ887P

【作者名】

Missing

【あらすじ】

信じるかどうかは自由。

だが、

事実は曲げられない。

これは私の身の上に起こった
紛れもない事実である。

(前書き)

世の中には、不思議なことなど山ほどある……

成田空港トイレ爆破事件

海外旅行に出発する友人の見送りに成田空港へ行った。搭乗時刻にはまだ時間があつたので、友人と空港内のカフェで時間を潰す。

ガラス張りのカフェから下を見ると、やたらと人が出入りしている。真下にはトイレがあるようだ。

1時間ほど時間を潰しカフェを出て、友人と搭乗口まで行き、見えなくなるまで見送ったあと私は車で家へと急いだ。

家に着きテレビをつけると、ニュース画面。やたらと騒いでる、なにか事件があつたようだ。

見ると、成田空港で爆破事件があつたとのこと。

現場は、
さつきまで友人といった、
カフェの真下の
トイレだった…

金曜日の夜、家に帰つてふと思つた。

(家から車で会社まで行つたら、どれくらいかかるんだろう…)

いつもは私鉄と地下鉄を乗り継いで会社に行つてゐる。もし、車で行つても時間的にたいして変わらないのなら、残業して終電がなくなつても安心して帰れる。

(よし、今度の月曜は試しに車で行つてみよう)

月曜日、少し早めに家を出て会社に向かつ。多少混んではいたが、思ったよりスムーズだ。

(これなら予定時間よりかなり早く着きそうだ。)

そう思いながら走つてゐると、途中から訳のわからない大渋滞…。

(なんだ? 工事か?)

そつと思つた辺りは、大手町まであと少しのところ。

ラジオをつけてニュースを聞いてみると、地下鉄でなにかとんでもない薬品が撒かれ、人がバタバタ倒れでいるとのこと。

この日、

いつもと変わらず地下鉄に乗つていたら、
私は今、
ここにいない…。

松本サリン事件

土日を利用して、一泊一日の慰安旅行で長野の温泉へ。

他のみんなは電車で現地へ向かつたが、どうせ行くなら帰りにいろいろ見てきたいと思い、私は一人、車で現地へ向かつた。

次の日、予定より早めに宿を出た私は、車を走らせ松本城へ行つた。
街中を観光し温泉に入り、松本を後にしたのが午後10時を過ぎて
いた…

『1994年6月27日の夕方から翌日6月28日の早朝にかけて、
長野県松本市北深志の住宅街に、化学兵器として使用される神経ガ
スのサリンが散布され、7人が死亡、660人が負傷した』…

一日遅かつたら、

私は
松本で

死んでいたかもしだい……

くじ運とケガの関係性

くじ運といつものにまったく縁がない。

商店街のガラガラの福引きで、38回連続でハズレを出した。
詳しい玉数は明記しないが、およそ、1／2億5千万の確率である。

そんな人間が、なにかしらで当選するどビうなるか……

チョコボールの金のエンジェル

左足のこう、骨折

ラジオ番組リスナーにうまいものセットプレゼント

肋骨骨折

TV番組でFaxが読まれた

車での事故……

等々、数え切れない。

『ひづらを立てればあづらが立たず』とでも言わんばかりだ。

ただの不注意と思われるかもしだいが、説明できないアクシデントに間違いないのだ。

そしてまた、幸か不幸かS-1バトルで特賞当選した。

4月には、
死んでいるかもしねれない…

死んだのかもしねない

体がだるい。風邪をひいたようだ。
症状はどんどん悪くなる…。

熱も38度を越えていたので解熱剤を飲んだ。
次の日、ずいぶん良くなつたように思えたので、とりあえず家のことを片付けようとその日一日ずっと動いていた。が、深夜になつてまたふり返した。

（ああ、寝てねばよかつたかな…）

そう思いながら、また横になる。
急激に熱が上がりだし、身動きがとれなくなつてきた。

次の日も、丸一日苦しんでいた。
寝込んでから何回着替えたろう、着替えるものがなくなるほど大量の汗をかく。
うどんを作つてもらいひとつち食べたが、まったく食欲がない。

熱を計ると40度をすでに越えていたので、とりあえず薬を飲み寝ることにした。

どれくらい経つたのか、きっと寝ているんだろうが、とにかく苦しい。

しばらくして変な夢を見た。

たぶん…夢…？

フワッショのようなものがパツと一瞬光り、体がフワッと楽になつた。

気がつくとそこは、すべてがオレンジ色の広々とした草原。空の上までオレンジ色のグラデーション…。言葉は出ない、ただひたすら気持ちがいい。とても幸せで安らぐような、例えよのない気持ち良さ…。

なにもかも、全てのこと 全ての人間全ての罪を許せる…とこりょうな気持ち良さだ。

ひとつ不思議なのは、風も吹いてない草原の、それも、足元にある草の穂先が揺れているのがわかる」とこの田で見ていないのに だ。

脳に（～）意識に（～）直接映像が送られてくるよのうな、妙なかんじ…。

（ああ… なんて気持ちがいいんだろう…）

そう思つた瞬間、夢（？）から覚めた。同時に、一気に苦しさが蘇つてきた。

あれはなんだつたんだ？…

熱も下がり動けるようになつた。

掃除をしようとしたベッドの下を覗くと、なにか不思議な水たまりがある。

（なんだら？…？）

ベッド面は”すのこ”のような状態になつていて、その上に布団を敷いて寝ている。

後でわかつたが、水たまりの正体は、布団を貫通して下に溜まつた汗だつた。

あの一瞬、

不思議な光景を見たあのとき、
死んだのかもしれない。

和菓子が好きなので、よく和菓子を買いに行く。

以前住んでいたところでは、行きつけの和菓子屋があつたぐらいだ。

よく買っていたのは「しあん系」。

団子も、みたらしは正直好きじゃないのだが、よっぽどのことがない限り滅多に買わない。

1月のある日、ふと思つた。

（団子食いたいな…）

いつものことだし、いつものように和菓子屋へ行く。
なぜかみたらし団子を5本買つた。

自分でも訳がわからない、嫌いなはずなのに…。

その日を境に、毎日毎日無性に団子が食べたくてしょうがない。
それも嫌いだつたみたらし団子のみ。

（なんだ？おかしいぞ？…）

食事までもがみたらし団子のみになつた。

和菓子屋が休みのときは次の日の分まで買つ始末。

夜中に食べたくなり、団子を探してコンビニをハシゴ…

（病的だな…）

そう思って、花屋をやつてる友達に相談したりもした。

「どうしたんだろうねー」

そう笑うだけだったが、自分にとつてはありえない事なのだ。

そんなことが何日も続いたある日、『だんご3兄弟』といつ歌があり、とんでもないヒットだと聞いた。

（へえ、だんご3兄弟かあ、変なタイトル…）

その日から、不思議とみたらし団子を食べたいと思わなくなつた。もともと好きじゃなかつたんだ、別に不思議じゃない…そう思つたんだが…

あれは、

なんだつたんだろう。

それ以来、

みたらし団子は食べていない。

いつたこどりこどりとなんだらつ……

夢の中で……

最初に見えたのは何かの券売機。

券売機の向かって右側から歩いてきた。

券を買い、そこから向かって左へ歩く。

入口は木製、入口と出口がそれぞれ1つずつあり、屋根は三角の形をしている。

どうやら遊園地のようだ。

入ると、右側には草花の植え込みがあり、その斜め上に光るもの……何かの建物か？光りが当たって反射している。

左側はなんだか薄暗い……。こちらには背の高い木が植えてあるようだ。

前を見ると、やかな上り坂になつていて、その先、坂の上の道の真ん中に、草のよつなものが1ヶ所に集中して生えている。植え込みなのか？……よくわからない。

……「」で一旦映像が切れ、次の場面。

坂を下りてくる自分と、隣にもう一人。

男なんか女なんかどんな関係なのかもわからない。自分より背の高い人だ。

2人並んで歩いてる……

夢から覚めふと思ったのが、やけにはつきりとした映像だったということ。
が、所詮 夢だ。

それから何年も経ち、その夢のことも、そんな夢を見たことすら忘
れてたある日、仕事の関係で、神奈川にある緑山スタジオへ行くこ
とになつた。

その送迎バスの中、何気なく見た窓の外に、どこかで見たような風
景が……

(夢……あのときの……夢だ……)

言葉を失つた。ただ呆然と見ていた。
一緒にいた友人の声も 耳に入らない。

(何もかも同じだー何もかもーーー)

そこは、一度も行ったことのない初めての場所。

遊園地の名前も、その日そこを見るまで知らなかつたのに…

緑山スタジオに着き、蒼ざめた私に友人が言つた。

「どうしたの？顔色悪いけど、気分でも悪いの？」

彼女は神奈川で生まれ育ち、神奈川に住んでいる。

そこで事情を話し、その場所について聞いてみることにした。

彼女は、何を言つてるのかわからない、というような顔をしていたので、私は、持つていたノートに夢で見た覚えている限りの絵を描き、ひとつひとつ説明しながら尋ねてみた。

不明だつた最初の部分、券売機の向かつて右側には駐車場があると
いう。

きっと車だつたんだろう、と彼女は言つた。

そして、それ以外の私が説明することに対し、何一つ間違はない
とはつきり言つた。

（なぜ何一つ間違いがないんだ？

行つたこともないのに…！）

ただひとつ夢と違つていたのは、入口の上の屋根に、遊園地の名前
が大きく書いてあつたこと。

一連のことには何かメッセージがあるのかもしれない。
だが……

あれから
何年経つたのか
いまだに、
そこへは行つていない。

一人多い……

旅行は好きだ。

計画を立てている時は楽しいもので、宿の予約をし 気に入った店
での食事の予約を取り、『当地でしか手に入らない駄菓子を頼む。

その作業も含め、旅行するのは好きだ。

数年前……

3泊4日の家族旅行のため全ての予約を済ませ、その日、北陸旅行へ出かけた。

車での旅行だったので道は不慣れだったが、これといった問題もなくなんとか宿に着いた。

チェックインのためフロントに向かう。

「4名様でご予約の……」

（あいおい、しつかりしてくれよ）

「いえ、3名で予約したんですけど……」

3泊4日ともなると、宿の予約だけでも大変なものだ。
きっと私が言い間違えたんだろう。

次の日、宿を出て次の目的地へ向かう。

途中、ずっと前から楽しみにしていた鮎専門の店で食事をする。

「4名様で予約を承つて……」

（予約したのは3人なんだが……）

「いえ、3人でお願いして……」

ホテル同様、食事や駅弁の予約もそこそこある。

このときも、自分が間違えていたと思つたんだが……

食事も終わり店を出て、趣のある町並みを散策した後、多少時間の余裕があつたので調整しながらゆっくり行こうと思つて、車を走らせた。

直後、妙な事故に巻き込まれてしまい、宿には予定時間を少し回つて到着した。

早速チェックインをする。

「 様、4名の、予約で…」

(まだ…)

初めて変だと思った。

我が家は3人家族。
いくらなんでも家族の人数を間違えるなんてこと、どう考えてもありえない。

言い間違えたにしても、全部といつのは流石におかしい。

(なんなんだ…?)

何かの間違いだと思いついた。
予約したところはあと2ヶ所。
流石にもうないだろうと…。

次の日、予約しておいた駅弁を受け取りに販売所へ。

「お待ちしてました。弁当4つですね?」
(いい加減にしてくれ…!)

楽しい旅行の途中だ、考えていてもしょうがない。

弁当を3つ購入し、最終目的地へ向かつ。

（「（）で一泊したら旅行も終わりだな。
最終日はゆっくり過（）そ（）」）

宿に着き、チェックインへ向かつ。

「4名様でお部屋を（）用意……」……

一人多い……。

一緒に旅行していたのは

いつたい

誰だつたんだろう。

ありえない事故

旅行の途中、郡上八幡へ立ち寄つた。

鮎専門の店で食事をし、次の目的地へ車で移動しようとした時、事
故に遭つた。

事故そのものはたいしたことのない接触事故なのだが、その状況が
妙だ。

不慣れな土地で、たいして広くもない道だったので、できる限り注意をして運転していた。

曲がり角で左折する際、そこを路線バスがこちらへ曲がってきていたため、停止線よりもかなり手前のところまで下がり、通行の邪魔にならないよう左端に寄つてバスが行き過ぎるのを待つていた。

バスはゆっくりとこちらへ曲がつて来る。

曲がりきつて通りすぎようとしたとき、車の右フロントにぶつかつた。

こちらが事故を起こすのならわかるが、路線バスは毎日同じところを それも何年も走つているものだ。そういう事故るものじゃない。それに、そのとき他に車は走つていなかつた。

事業所へ行き、いろいろと事故処理の手続き等をしながら、バスを運転していた人と話をした。

その人はもう何年もバスを運転していて、事故を起こしたのは今回が初めてだと言う。

自分でもよくわからないが、引き寄せられるかんじがした 申し訳ない、と言つてくれた。

幸い事故はたいしたことなく、双方に怪我もない。

その後も旅行日程をこなせる程度のものだつたのだが……

それにして
あの事故は
いつたい…

知りたくない情報

ある日を境に、人のことがよくわかるようになつた。

占いは好きだが、占い師になろうと思つたことはないので、私にそんな力はない。

それに、私のような人間はきっと他にも山ほどいるはずだ。

例えば、

まったく面識のない、見ず知らずの人と話をしたとする。

およそ1時間で、その人の考へてることや考え方、生き方人間性、これまでどのように生きてきたか、何に悩んで何をどうしたいのか、口には出さない本心や、ときには家族構成までわかることがある。その程度なら「いつものこと」で考へ込むことはない。ただ…

知りたくないことや、知らないほうがいいことまでわかつてしまつのは、自分にとつて非常に辛い。

男でも女でも関係なく、相手の嘘が手に取るようになるとわかる。

…というより、アンテナが電波を受信するように、隠していくこと隠したいと思つてこることを受信してしまつ…。

ただ、そこまでになることは条件があるようで、瞬間的にその相手を好きになる（興味を持つ）ことが必要なようだ。

話をしながら瞬間的にでも相手を好きになることができれば、およそ9割の確率で、相手のほほすべてがわかる。

知りたくない情報までもが…だ。

うらやましいと言つ人もいたが、私にとつてはありがた迷惑以外の何者でもないので、今はできるだけ何も考えないよう、努力している。

ある日を境に、と言つたが…

あの日、

不思議な夢を見たあの日から、見えるものが

変わってしまったようだ

秋葉原殺傷事件

その日、

用事と個人的な買い物がありアキバへ行つた。
ここはいつ来ても楽しい。

用事を済ませ、個人的な買い物に没頭していた。

11時を回り、腹も減ってきたのでそろそろ帰ることにした。

そうは言つても、やはりいろいろ気になるし いろいろ見たい。
なんだかんだと、秋葉原駅に向かつたのは11時半をすでに過ぎていた。

『2008年6月8日午後0時30分過ぎ、外神田4丁目交差点で
2トントラックが赤信号を無視して突入、歩行者5人を撥ね飛ばし
た。

トラックを運転していた男性は車を降りた後、倒れこむ被害者や救護にかけつけた通行人・警察官ら14人を、所持していた両刃のダガーナイフで立て続けに殺傷……』

あの日、
1時間遅かつたら
間違いなく
被害者の一人になっていた

番外編　『ネクロノミコン』

この話は、昔 友人から聞いたもので実際に自分で体験した話ではないので、
本当にあつた…… ではなく、

『本当にあつた…かもしない不思議な話』

としてお話をします。

『アラビア人「アブドル・アルハズラット」（アブドウル・アルハザードや、アブド・アル・アズラットと記される場合もある）が著わしたとされる架空の魔道書。複雑多岐にわたる魔道の奥義が記されているとされ、それ故か魔道書そのものに邪悪な生命が宿ることもあるという。』（『ラヴクラフト全集』中）』

知っている人はたくさんいるだろう、魔道書なるものをもとに書かれたネタ本と言われるシロモノ。

この本の終わりに、魔法陣や呪文といった、怪しげなものが掲載されているのもご存知かと思う。

これを、無駄だと知りながら試した人はいるだろうか…？

本当に何も起こらないのか？

本当に無駄なのか？

本当に、ただのネタなのか？…

……実際、試した人がいたのである。

いや、いたそうなのである。

当時、某漫画家（今では超有名らしいが…）のアシスタントをしていた友人から聞いた話。

彼の仲のいい友達の修行僧が、高尾山の奥深くで修行中のこと。

この修行僧は、僧でありながら邪念の多い人で（だから修行しているのだろうが…）、俗世間に非常に興味があった。

さらに、僧でありながら、魔術や魔道、悪魔や忌まわしいものにも

相当な興味があつたといつ。

ある日、どこで見つけてきたのか、先述の本を手に入れた。
そこに書かれていた怪しげなネクロノミコト。興味を持たないはず
がない。

ずっと、これは本当にただのネタなのか試してみたい、と思つてい
た。

ある日の吉日（事を行うにあたつての）、決められた通りの時間、
決められた方角、必要な物　必要な言葉を用意し、試してみること
にした。

（実際に何かしらの魔術なり呪文なりを行う際、風の向きや月の満
ち欠け、何時何分等の細かい準備が必要なのだそうだ）

決められた場所に物を置き　準備を整えた後、指定の場所に立ち、
指定の言葉を発する…

しばらく待つたが何も起こらない。
僧はこの行為を何度も繰り返した。

それでも何も起こらないので、やっぱりただのネタだったのか…と
思い、召喚を終わらせようとした時…

空気が変わった。

なんとも言えない、張り詰めた空気……

喉の奥が凍り付いたようで、まともに息ができない……

例えようのない、重力を伴つた冷たい空気だったといつ。

僧はあまりの変化に恐ろしくなり、召喚したものを元の場所に返す作業を必死に行つたそうだ。

そのあと、何をどうやつたのか、どこをどう帰つたのか覚えていないらしい。

本当かどうかいまだにわからない。

疑おうと思えば疑わしいばかりのことなのだが、それを話したときの僧は、ただならぬ表情だったといつ。

これを聞いたのは、彼が僧から話を聞いた何ヶ月も後なのだが、彼がこの話を聞いたあと、まったく連絡が取れなくなつたそうだ。

実際どうだったのかわからないが、連絡が取れないので心配でしょ
うがない……

と、そのとき彼は言つていたが……

世の中には
不思議なことなど山ほどある
僧はあれから
どこにいつてしまつたのか……

（番外編 終わり。）

トイレ

今だから笑える恐怖体験。

注

食事中方、想像力豊かな方は 決して読まないでください。

これは今だから笑えるが、その何分かは本当に恐怖だった……

しばらく便秘気味だった私は、久しぶりの『お知らせ』に呼ばれ、トイレに入り 用をたした。

(腹が軽くなつた、久々にスッキリした)

そのあと、いつものように水を流す。
調子が悪いのかなかなか流れてくれない。

このとき、危険を察知して 早めに手を打つておけばよかつた。
やつすれば、あんなことにならずに済んだのに……

あれ?と思ひ、2・3回流してみる。

その後、「ポポポポポ」逆流してきた!
トイレが……詰まつた……!

どんどん水が上がつてくる。

アレだのコレだのと一緒に、便器のフチまで水が……!

(あ、――――――――――――)

このまま溢れたら……

家中水浸しこうか、家中……浸しになるじゃないか――

(待て!待て!やめろ!――

来るな、来るなー！！

もつと早くにスッポン処理をしておけばよかつた。
でも、もう遅い。

水は便器のフチギリギリまで迫つてゐる。

今ここで紙きれ1枚でも落としたら、確実に溢れるくらいの表面張力で保たれてる状態だ。

またぐ水が弓かなし...

そのとき何を思ったのか、便座を上下にパカパカし始めた。

人間、追い詰められ極限状態になると、何をしてもかすかわからない。きつと私は、そのとき、パカパカすることによる振動で、どうにかなると思ったのだろう……。

せめて5リットルでも水が引いてくれれば……

便器の前に座り込んで何分経つたろう。

いろんなものが浮いてる便器を見つめながら、かなしくなってきた。

(ずつと)のままだらりとした。(まかで溢れていた)。

いろんな恐怖と情けなさで泣きそうだった。

ジテルベント

「ノン... ノホホー... ノッ ノッ ノッ... ノホー...」
一気に流れていった。

よくよく考えてみれば、あれもそれも水溶性だ。
時間が経てば自然と流れしていくものだ。

なんでもつと早く気付かなかつたんだろう。
ホツとしたら、なんだかバカバカしくなつてきた。

が、なんにしても、情けない」と窮まりない……

それ以来、
用をたす時は
流しながらにしきつと

(後書き)

世の中には、不思議なことやありえない偶然が山ほどある。

あのとき ああしなかつたら……とか、
あのとき こうしたから……とか……。

それと気が付かないだけで、誰の回りにも 実はいろんなことが起
つてゐるのではないのでしょうか。

もつと注意深く自分のことを見てみると、
ありえない偶然が渦巻いていることに気が付くはずです……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887p/>

本当にあった不思議な体験

2010年12月31日03時37分発行